町内会短信 11月号

霜月

2022年11月1日　川沿中央第一町内会長　金山征晴

今年も残すところ2ヶ月となりました。コロナ収束の淡い期待はなかなかかないそうにありません。北海道はもう第8波が始まってるとも言われます。5回目の予防接種のクーポンが送られてきました。焦らず騒がず静かにやるべき事をきちんとやって時期を待つ。それが大事なのかもしれません。

10月・11月の活動報告及び活動予定については下記の通りです。

10月の町内会活動報告

10月　5日(水)　**ふれあいガーデン整備**
10月　8日(土)　**町内会パークゴルフ大会**　(藻南公園C)
10月 12日(水)　**町内会資源回収／緊急貯水槽説明会**(水道局　1名参加)／**どんぐり公園清掃**（Bグループ）
10月 19日(水)　**ふれあいガーデン整備**
10月 21日(金)　**連町理事会**　(地区センター　副会長出席)
10月 25日(火)　**事業検討委員会**
10月 26日(水)　**どんぐり公園清掃**　(Cグループ 9:30)

11月の町内会活動予定

11月 2日（水）**どんぐり公園清掃**（Dグループ）9：30
11月 6日（日）**連町輪投げ大会**（地区ｾﾝﾀｰ多目的ホール）9：30
11月 9日（水）**町内会資源回収**
11月13日（日）**事業検討委員会**
11月16日（水）**どんぐり公園清掃**（Eグループ）9：30

今年のふれあいガーデン整備は終わりました。来年もまたご協力お願いします。

コラム　川沿の小窓から ⑥　川沿中央第一町内会　相談役　柴田田鶴子

我が町内には、目には見えないけれど、いなくなれば即酸欠状態となり、息苦しさを覚える「酸素」の様なありがたい存在の方々がたくさんいらっしゃる。気になりながらも療養中でなかなか『ふれ合ガーデン』に顔を出せない私に、「無理しないで」と声掛けして下さる方々、今年も師匠尾崎氏にお褒めの言葉を頂ける程の立派なガーデンとなり、道行く人の目を楽しませてくれている。パークゴルフで車を持たない方の為に気軽に車を出して下さる方々、老人クラブ「ほほえみ会」開催の下準備や、会終了後全員が帰った後も黙々と後片付け消毒に精を出して下さる方々、疲れた顔をして歩いていると、「お元気？ お茶飲みしていかない？」と誘ってくださる方々、そんな方々の暖かい心遣い御好意が私にとっては何よりの心の酸素補給となり、老いたる身を又一歩踏み出させてくれる力となる。一時期銀座の一角で流行った酸素バーが、ここ川沿では常に新しい酸素ボンベで補給されている。有り難いことである。

裏面へ ⟶

郷土史より（視野を広げて）松浦武四郎と北海道　(2)

郷土歴史家　吉田邦行

1843 年、26 歳のとき長崎で僧侶として働きながら中国大陸や朝鮮に渡るチャンスをうかがっていたとき、町年寄りから重大な知らせを聞く。それは蝦夷地の情報であった。「蝦夷地が大国ロシアに狙われている。幕府内で緊張が高まっているが、幕府はロシアに対し防衛力が無力である」と。広大な蝦夷地は未知の部分が多く、幕府も対応に苦慮している状態であった。まだ見たこともない未開の地に武四郎の血が騒ぐ。「国の一大事、蝦夷地で実情を見聞し、蝦夷地の危うきことを広く世の人々に知らせなければ」と決心する。これまでの調査は海岸線ばかりであった。武四郎は内陸部を調査し山脈や川筋を調べつくして、国に役立てる志を立てる。武四郎の蝦夷地調査は足掛け 13 年(1845～1858 年)、6 回におよぶ。

第 1 回	南側の海岸線を瀬棚から知床まで調査。	(1845 年)
第 2 回	残りの北側の海岸線と樺太南部の調査。	(1846 年)
第 3 回	千島列島の国後島・択捉島の調査。	(1849 年)
	著作物「初航蝦夷日誌」・「再航蝦夷日誌」・「三航蝦夷日誌」を著す	(1850 年)
	任　務 以降は幕府の役人として調査に当たる。	
第 4 回	蝦夷地全体の海岸線と樺太の南側調査。	(1856 年)
	著作物「武四郎廻浦(かいほ)日誌」31 巻を著す。	(1856 年)
	任　務 東西蝦夷山川地理取調御用を命ぜられる。	(1857 年)
第 5 回	蝦夷地西側の内陸部調査。	(1857 年)
第 6 回	蝦夷地東側の内陸部調査。	(1858 年)
	著作物「蝦夷山川地理取調日誌」85 を著す。	(1859 年)
	著作物「蝦夷山川地理取調図」28 枚を著す。	(1859 年)

調査記録は地理、気候、風土、外国に対する防衛策まで書き込まれ、幕府が知りたかった未知の部分を明らかにしたのである。

当時、アイヌ民族に対して松前藩と松前商人たちは、運上屋(会所)を設置し、狩猟や漁業の物産を買い取る仕組みを作り上げていた。藩から運営を任されていた商人たちは、少しでも収益を増すため交易だけでなく、労働を強制するようになった。昼夜働かせ、低賃金、未払いなど、商人たちはアイヌ民に対して耐え難い横暴を繰り返していた。「アイヌの人々の窮状を知った以上、知らぬ振りはできない」、武四郎は幕府に松前藩を糾弾する「近代アイヌ人物語」の報告書を提出する。しかし、信任を得ていた老中・安倍正弘は老中首座交替、「安政の大獄」という政情下にあっては、それらの日誌を公にされることは許されなかった。 **(次号につづく)**